

# ABIC 国際社会貢献センター Information Letter

No.21 2008年3月

国際イベントへの協力	2007ユニバーサル技能国際大会でABIC会員31名が活躍	2
	技能の祭典「2007年ユニバーサル技能五輪国際大会」体験記	2
	技能五輪イタリア選手団付通訳ボランティアに参加	3
	第7回国際アビリンピックに通訳として参加	4
	アビリンピックでの活動を終えての感想・体験記	
	—選手団との感動的な心の触れ合い	5
政府関連機関への協力	27年ぶりのイラン—JETROの専門家として再訪	6
	21世紀最初の独立国、東ティモール紹介	7
	地中海の南の岸辺から	8
	グアテマラでのシニア海外ボランティアの2年間を顧みて	10
教育	あくなき「知」の探求	11
	青山学院高等部での初講義を終えて	12
	ベトナム・ダナンでの小・中学生への日本語教育	13
エッセー	新上海から 地鉄（メトロ）に乗って	14
書評	『男なら、ひとり旅』	15
新刊紹介	中国担当者にこの一冊を！『中小企業の中国進出Q&A』	9
事務局だより	日本語教師養成講座 第4期講座のお知らせ	15
	会員入会のお願い	15
	新会員登録票・アンケートを未提出の方はご協力願います。	12

特定非営利活動法人 国際社会貢献センター (ABIC)  
Action for a Better International Community

<http://www.abic.or.jp>

〒105-6106 東京都港区浜松町2-4-1  
世界貿易センタービル6階 (社)日本貿易会内  
Tel : 03-3435-5973 Fax : 03-3435-5979  
e-mail : mail@abic.or.jp

【関西デスク】  
〒552-0021 大阪市港区築港2-8-24 pia NPO 4階 413号室  
Tel & Fax : 06-4395-1188  
e-mail : kansai-desk@abic.or.jp

## 国際イベントへの協力

# 2007ユニバーサル技能国際大会で ABIC会員31名が活躍

2007年11月14日～21日に沼津市と静岡市で第39回技能五輪国際大会と第7回国際アビリンピック（身体不自由者の技能五輪）が、大会史上初めて同時開催された。ABICから会員31名が静岡県庁およびイベント対応会社経由で応募し、技能五輪は20名、アビリンピックでは11名の方々がそれぞれ競技会場での通訳業務、選手団のアシスタントボランティアとして活躍した。それぞれの競技会場を担当した4名の会員の活動レポートを下記により紹介する。

## 技能の祭典

### 「2007年技能五輪国際大会」体験記

にしやま かつあき  
**西山 勝昭** (元 住友商事)

11月14日から21日まで、静岡県で大会史上初の「第39回技能五輪国際大会」（沼津会場・門池地区）と「第7回国際アビリンピック」（静岡会場・ツインメッセ静岡）が同時開催された。開会式には、名誉総裁の皇太子殿下が臨席され、一部競技会も見学された。

まず、今大会概要だが、技能五輪（2年に一度）は、46カ国・地域から選び抜かれた816人の22歳以下の選手が47職種でその技を競った。一方、アビリンピック（4年に一度）は、障害のある15歳以上の選手378人が参加し、両会場合せ来場者は約29万人となった（主催者発表）。

私は、抜き型競技（Mould Making）をサポートした。この競技の参加国は8カ国（日本、韓国、インドネシア、タイ、インド、台湾、オーストリア、アイルランド）で、選手は自動車・電化製品等の部品製作に必要なプラスチック用金型製作の技能を1ミクロン（0.001ミリ）の精度で

競うもので2課題を与えられ、評価を受ける。昨年度の全日本大会を勝ち抜いて出場する日本選手には金メダルが期待される種目だ。

国際大会ということで競技に先立ち、エクスパートと呼ばれる参加各国の専門技術指導者による、諸規定の入念な打ち合わせが約1週間続いた。一方で、加工機械・設備全般の準備を受け持つスーパーバイザーが競技を円滑に進めるため、早くも11月1日から会場入りし、不眠不休で動き回っていた。その気の遣いようは大変なもので、本当に頭が下がる毎日であった。私の主な役目はそのスーパーバイザー付きの語学スタッフだ。

公平性と、規定遵守、課題情報の事前漏洩の防止を図るために、会場内は連日ピリピリとした空気に包まれる。どこに行くにも、エクスパートを取りまとめるチーフ・エクスパートの許可が必要だ。かかる準備が取り行われた後に初めて選手が「晴れ舞台」に立つことができるのである。

いよいよ、競技が始まるということで、各競技会場に各国選手団が続々と到着し、会場は若さあふれる選手団の登場で一瞬にして華やいだムードが漂った。ただ、それも束の間だ。この世界大会に照準を合わせ、長年厳しい練習を重ねて、選りすぐられた各国代表選手たち故、競技に



競技会場にて筆者



競技会場に到着した選手たち



日本代表の安達裕喜選手と筆者

入ると表情も一変、ひたむき且つ真剣に競技に取り組むその姿は、圧倒されるものがあり、さすがに世界のトップの選手たちである。観客も固唾をのんで無言（選手に声を掛けてはいけない）の応援、選手達の動きを見守った。

我が抜き型競技でも、日本の代表選手がプレッシャーを跳ね除け見事優勝、金メダルに輝き世界の頂点に立った。万歳！！

今大会は、静岡県の粘り強い招致活動が奏功して、念願の世界大会開催にこぎつけたことではあるが、大都市圏での開催でなかったため、会場付近の利便性の問題、ロジスティックス上の不利な点は否めないように感じたのは私だけであつたであろうか？まさに静岡県民、静岡・沼津両市民の、郷土色豊かな心暖まるホスピタリティーがそれら弱点をカバーして余りある大会と成し得たのではないであろうか。

ところで、優れたものづくり、技術の伝承が大きな課題となっている現在の日本である。過去の大会では一時期、韓国等アジア勢が躍進日本勢の先行きが懸念されたが、前大会05年のヘルシンキ大会で日本は金メダル5個で34年ぶりにトップに返り咲き、今大会では16種目で金メダルを獲得（いずれも技能五輪）ホスト国としての面目と（ものづくり力）の底力を強く印象づけることができたのは同慶の至り。更に力をつけて、世界をリードし続けてもらいたいものである。

末筆になったが、今回ABICからは技能五輪及びアビリンピックの語学スタッフとして31人が、現地にはせ参じサポートした。会場が分散、課題競技も多く、行動も制限されていたため、筆者も同僚の活躍する様子をつぶさに見学する訳にもいかず、全容を網羅してレポートすることは不可能だが、皆さんからの後日談を纏めれば、各人がそれぞれの持ち場で語学サポートばかりではなく、国際ビジネス経験・感覚を駆使して柔軟にどんな仕事でも直ぐに対応、協力も惜しまない獅子奮迅の働きぶりは、関係者に高く評価されていたとの声が多く、国際貢献の一助としてABICの新しい足跡を残せたのではないかと思う。

## 技能五輪イタリア選手団付通訳ボランティアに参加

にしざわ しゅんいち  
西澤 俊一（元丸紅）

ABICの紹介がきっかけで、第39回技能五輪国際大会に8日間ボランティア参加した。私の担当は技能五輪の選手団付き通訳アシスタントで「南チロル、イタリア」チームを受け持った。

主な活動は、選手団チームリーダーと連絡を取りながら朝夕のバスでの移動時刻・乗降場所の確認・誘導、毎日変わるバス同乗の他国選手団の確認、開会式・交流会などのスケジュール確認、工具の有無の相談、さらには故国へのお土産物の相談などである。

「南チロル、イタリア」チームは選手団団長、チームリーダーのもと選手18名（うち女性2名）が18職種の競技（全体では47職種）に参加したが、活動開始前後から少し意外な出来事に出くわしたのでそのあたりから記してみよう。

11月12日朝、競技準備のため会場に向かうバス内で選手団にイタリア語で挨拶したが、受け答えに若干の間があく感じがした。一瞬こちらの言い方が悪いのかと思ったが、チームリーダーがイタリア語で言うには、「我々の日常会話はドイツ語かチロル地方の方言で、イタリア語はその次。南チロルは第一次世界大戦後にオーストリアからイタリアに割譲された地域で、今でもドイツ語を話す人が約7割」とのことである。南チロル主体の選手構成とは聞いてなかったのでまずはびっくりした。

その前日11日は成田出迎えの予定であったが、前々日になって出迎えは不要との連絡があった。これも後でわかったことだが、一行は11月8日には沼津に入ったそうで、早く来た理由は時差ボケをなくして実力が発揮できるようにするためとの立派な段取りで、これも接しなれたイタリア人とは一味違っていた。



選手村での歓迎会にて  
(左から南チロル・イタリアチーム・リーダー、筆者、イタリア語ボランティアの女性、リヒテンシュタインチーム・リーダー)



選手村から開会式に向かう選手団と



沼津市今沢中学校で生徒代表と選手団（中央が選手団長）

12日午後は「一校一カ国サポート交流」で沼津市立今沢中学校を訪問し、全校で9クラス、290名の生徒がそれこそ熱烈歓迎してくれた。講堂にはスリッパに履き替えて入ることとなったが、選手数人の足のサイズが極端に大きくスリッパが合わず大騒ぎに。これで選手も生徒も緊張が一気にとれて交歓行事に臨めたのも事実である。選手一人ひとりにインタビューが行われ、「担当職種においてどんな点が難しいか」「毎日どんな練習をしているか」等々の質問が出た後、選手からも質問があり、最後に生徒全員で作ったイタリア国旗の色使いの千羽鶴とバッジが、チームからはチロル地方に関する雑誌とチームバッジの交換が行われ、もみくちゃ騒ぎの見送りで学校を後にした。

15日から18日までの競技本番で我がチームはグラフィックデザインと金属屋根葺きで金メダル、広告美術で銀、れんが積み、石工、洋菓子製造で銅、他に優秀賞8つと大健闘した。チームリーダーのもと規律のとれたチームであったことがこの好成績につながったと思う。

毎日のバスでの行き帰りに選手と色々話をしたが、彼らが語った日本の印象は：

「日本人はやはり大変親切。自分たちのドロミテ地方にも高い山が多いが富士山には感激した。沿道の家々が随分小さい、お墓が家並みの間に点在しているのが印象的で、先祖を敬う気持ちがより伝わりやすいのではと思った」等々。

技能五輪の次回2009年はカナダのカルガリー、2011年は英国のロンドンにて開催予定のことである。同じボラン

ティア仲間にはカナダにも英國にもボランティアで出掛けると意気軒昂な人もみられたが、これも私同様、今大会を通じてなにか非常にさわやかで満足な気分になり、ボランティア活動を満喫できたことの表れかと受け止めている。

## 第7回国際アビリンピックに 通訳として参加

かまだ よういち  
**鎌田 洋一**（元三井物産）

技能五輪国際大会と共に11月15日から18日に開催された国際アビリンピックに通訳として参加した。アビリンピックは障害者の技能五輪として4年に1度開催されるもので、今年は日本の静岡市が舞台となり、技能競技には23カ国・地域から約370名の選手が種々の分野での技術を競った。

11月13日から15日の3日間はその準備期間として、主催者、審査員と競技の進行、通訳方法等の打ち合わせ、競技現場での競技者の通訳との打ち合わせ等を行い、「障害者」という言葉の英語の表現方法に関する細かい指示もあった。ただ、会場や主催者の都合により打ち合わせ時間がとびとびで空き時間が多く、効率の悪いものであった。テレビではアビリンピック関係のニュースが連日かなりの時間報道され、また駅や町では車椅子の外人や、「Skill 2007」のロゴの入ったオレンジ色のジャンパーを着たボランティアが目立ち、大会ムードが高まってきた。

11月16日、競技の当日。競技場は静岡ツインメッセ内に特設された。私の担当競技「家具製作・基礎」の競技参加者は、日本人3人（いずれも知的障害）、韓国人（知的障害）、中国人（下肢障害）、インド人（聴覚障害）の計6人であった。3人の外国人とは、それぞれが帯同している英語—母国語の通訳に、私が英語で通訳するという形となり、ワンクッション入ることで随分時間がかかる。

競技は、事前に選手に配布されている図面に従って、また当日支給される材料を使って、蓋のついた木製の箱を製作するもので、使用可能な工具も細かく指定されている。お国柄もあって、日本人はお揃いの工具を作業台に整然と並べていたが、インド人は競技直前に、バッグからあまり



競技会場にて筆者



インド選手（聴覚障害）のサポートに制限時間を知らせる筆者（右）

見かけない形状のカンナ等を次々と魔法のように取り出していた。中国人のノコギリも今まで見たことのない形のものであった。

競技時間は9:00～12:00、13:00～16:00の計6時間で、午前8時半に審査員主査から競技上の注意が伝えられ、緊張感が全員にみなぎる。競技開始後は全員が黙々とわき目もふらず作業に集中し、通訳は選手から散発的に出る質問に対応するだけである。韓国人選手は強度の知的障害者で、競技場のすぐ横に陣取る韓国人コーチから始終大声（日本人には怒声に聞こえる）で指示が出ており、パニックに陥るのではないかと心配した程であった。

韓国人選手だけは制限時間内に完成できず、しかしどうしても完成したいと頑張るので、失格にした上でコーチや審査員までが作業を手伝って曲りなりにも作品は出来上がった。その作品が審査台に置かれた時には、競技場にいる全員から拍手が起こるという感動的なシーンもあった。

競技終了後の審査段階での通訳には相当時間がかかると聞かされていた。しかし審査員の一人であるガーナ人が来日不能となり、日本人審査員2人だけで当然通訳は不要となり、私は思ったより早く仕事から解放された。

審査結果は翌日発表されるが、審査員に予想を聞いてみたところ、エースを揃えてきた日本が金、銀、銅を独占すること間違いなしのことであった（実際にその通りとなつた）。

通常の通訳と異なり、障害を持つ若者との触れ合い、思わず新鮮な体験の機会を頂いたことに感謝する。

## アビリンピックでの活動を終えての感想・体験記 —選手団との感動的な心の触れ合い

須賀 なおひこ  
(元ニッセイ同和損保)

ジム、アルビン、フローレンス、ジュディ、エーロン、イエオ、ユーゲン、コー、パトリック等々、選手、役員、介護者の27名と再会を確約して、固い握手、ハグと涙のお別れの時、また同時に新たな友情関係の確かな始まりの瞬間でもあった。

それは、世界61カ国・地域の代表選手が、もの作りやサービスの技を競う「2007年ユニバーサル技能五輪国際大会」と「国際アビリンピック」が静岡県において大会史上初めて同時開催され、ABICよりの紹介で11月13日から18日まで、アビリンピックにおいてシンガポール選手団付通訳のボランティアとして活動した。

シンガポール選手団とは、朝7時半から夜8時半ごろまで行動を伴にして、選手団の一員となり切り、選手団からの様々な要望に応えるよう努めた。求められたことに対する成果が問われ、“この人は出来るか”、“頼りになるか”が、選手団全員により評価される。この期待に応えて成果を示した時、信頼され、いろいろな相談やアドバイスを求めてきたし、一団となって行動できた。また、選手団の一人一人と会話するように努めたことも団の結束にとって、大変効果があったと思う。

日本側の組織が日本組織委員会、静岡県とその他ボランティア団体という寄せ集めのため、組織として十分にはマネジメントされておらず、シンガポール選手団の要望を通すため、誰がキーマンかを早く的確に掴むことが重要であった。問題の解決は、ベストを目指し、悪くてもグッドではなく、ベターを獲得するように心掛けた。

私は、今回初めて本格的なボランティア活動に携わったが、この体験は一生涯忘ることのできないよい貴重な思い出として心に残ることだろう。



シンガポール選手団のメンバーと筆者（右から二人目）  
第7回国際アビリンピック国際会議の会場にて（ツインメッセ静岡）



第7回国際アビリンピック国際会議（ツインメッセ静岡）

## 政府関連

## 27年ぶりのイラン—JETROの専門家として再訪

羽田—関西空港—ドバイと航空機を乗り継ぎ、ドバイ空港で2時間の接続でテヘランに向かった。離陸して少しして上空から下を見ると、砂漠と思ったが、どうも色が真っ白で一面雪に覆われているのに気付き、予想以上の大雪に大変驚いた。入国後聞くと50年来の大雪と寒波であったとのこと。2時間でイマム・ホメイニ空港に着陸。

いよいよ27年振りのイラン入国のために入国審査カウンターに行く。審査官がパソコンに私のビザのデータを入力し、滞在ホテルを聞くだけで2分で終了。以前の駐在時は旧国際空港で2~3時間入出国にかかっていたのに比べ、あまりの速さに驚く。手荷物検査も機械に通すだけで、着陸後あっという間に、零下10度の凍りついた空港ビル外の地上道路に立っていた。

今回のイラン訪問の目的は、イラン貿易振興庁（ITPO）が開催するマーケティングのセミナーに、JETROが「日本の商社の機能と役割」について講演する専門家を一人派遣したためである。私は1978~80年住友商事テヘラン事務所に駐在しており、最近はいくつかの大学で総合商社論の講義を行っているので、イランの現状を見ることに大変関心を持って現地に赴いた。

マシャッド、タブリーズおよびテヘランの3大都市のセミナーで講演し、合計640名もの参加者があった。イラン政府は石油以外の分野でも輸出入を拡大したいという意欲が強く、参加した現地商社・メーカーなどの関係者も同じ考え方で、日本の商社活動から学ぼうという関心は非常に強かった。



たにがわ たつお  
谷川 達夫（元住友商事）



ホメイニ師の写真の前で（27年前にも写真を撮った）

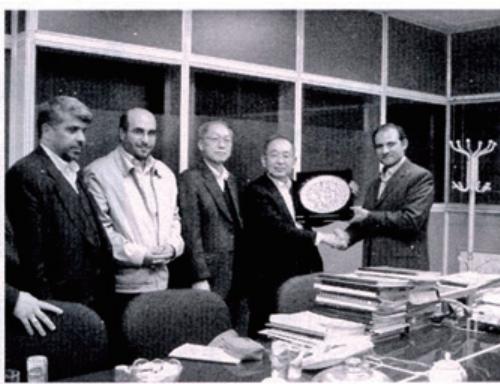
27年振りのテヘランでは、車で移動中は絶えず以前の面影を追い求めていた。街には当時の「ペイカン」という国産車に加えて、多くのメーカーの新型車が走っているのが目立った。特に街の北部は発展が目覚しく、高層ビルやマンションが林立し、高速道路が交差しているのが印象的であった。街は非常に活気があり、朝夕は交通渋滞が激しかった。いくつかの日本商社のオフィスを訪問し、主管の方からビジネスの現況を聞くことができた。マシャッドとタブリーズは初めての訪問であったが、自動車部品やサフラン・果物などの産業を抱える大都会であった。

ハードスケジュールであったが、私の駐在時（ホメイニ革命からイラン・イラク戦争まで）と違って、非常に落ち着いた状態で、改めてイランのすばらしさを実感することができた。イランの代表的なメニュー“チロキャバブ”（ご飯に羊肉の挽肉を焼いたものをバターと共に乗せ、生玉ねぎと焼きトマトが付く）の味は変らず健在で、ペルシャ絨毯は今まで以上に魅力的に見え、ペルシャ語の単語もいくつか思い出した。JETROの嶋田所長に案内いただいた有名なバザール（市場）は、人を押しのけなくては歩けないほどの人出で活気に溢れていた。

駐在時のイラン側カウンターパートが現在も企業グループのトップマネジメントで活躍しており、メールで連絡取れたので再会し、イランレストランで夕食を共につつ懇談し、この27年のギャップを完全に埋めることができた訪問であったと実感した。



テヘランのセミナーの中でのパネルディスカッション  
(左から2人目筆者)



イラン貿易振興庁（ITPO）のオフィスにて

## 政府関連

## 21世紀最初の独立国、東ティモール紹介

2007年1月から2008年1月まで、私はJICAより東ティモール大統領府財政・金融アドバイザーとして派遣された。以下に東ティモールの概略をご紹介する。

グスマン首相と  
星野 和俊ほしの  
**星野 和俊** (元東京銀行)

## 東ティモールのプロフィール

日本人の海外旅行の人気スポットにバリ島がある。成田を午後4時に出発した便は7時間半の飛行後、夜間に南緯9度の常夏の島、バリ島デンパサール空港に到着する。翌朝の便で約1時間半のほぼ真東への飛行を経て到着するのが、私の勤務地であった東ティモールの首都ディリである。国土面積は1万4千平米、日本の長野県とほぼ同じである。人口約100万人、国民総生産(GDP)約4億4千万ドル、国民1人当たりのGDP約440ドル、と世界最貧国の一つである。

## 21世紀最初の独立国

東ティモールには16世紀初めにポルトガル人が来航、白檀を唯一の植民地産物としてきた。時代は下って1942年45年の間、日本軍がオーストラリアを睨む軍事的位置関係から軍事占領していた。1974、75年に至り当時のアンゴラ、モザンビークを中心としたポルトガル旧植民地が独立に動き、これに呼応した独立運動が東ティモールの左傾化、キューバ化を招くと懸念したインドネシアが西側諸国暗黙了解の下、武力併合した。

1991年、メディアがインドネシア軍による人権侵害を大きく報道、徐々に世界の目が東ティモールにも注がれていたが、99年8月に住民投票で独立を選択した直後、インドネシア軍の後ろ盾を得ていた民兵が虐殺・焼き討ちの暴挙に出たため、急速国連が介入、国連暫定統治を経て、2002年5月に独立した。

## 政治の現状

政治体制は議院内閣制である。現在の第2次憲制内閣の実権はグスマン首相が率いるCNRT党が中心の連立与党が掌握し、国家元首である大統領は象徴的存在にとどまる。2002年より第1次憲制内閣を担ったのは前与党フレテリンで、その中核は1974、75年当時の青年独立運動家が握り、その盟主意識と一党独裁傾向が顕著であった。建国後5年経った後も、なんら充実・成長を見せることが無かつ

たように見える立法・行政・司法は依然弱体のまま、特に裁判所、警察、軍は未だ形をなしていない。

## 2006年5月～7月の政治・社会の混乱

2006年5月、当時のアルカティリ首相が待遇改善を求める594名の国内西部出身の兵士を解雇した。これに端を発する国内の混乱は、警察官10名を含む死者37名、住居が焼き討ち、強奪などにあい、追われて公園や教会の庭、空港近くの空き地などに国内難民として流入せざるを得なくなった国民数は、一時15万人に達した。これにより国内東西の複数種族間の攻撃・復讐の悪循環を招く混乱となり、02年以降徐々に退去していた国連平和維持軍の応援を再度仰がねばならないことになった。

## 日本との関係

日本は最大の援助国の一であり、自衛隊の施設部隊が2002年から2年間インフラ復旧に活躍した。自衛隊が引き揚げた後、現地政府に贈与された建設機器の維持管理・活用のための指導・道路管理プロジェクトをはじめ、稻作農家支援灌漑用水建設・技術指導プロジェクト、環境保護のための流域管理、港湾設備補修、浄水場建設、地方病院建設など数々のプロジェクトで援助事業を行なっている。

またNGOを中心とした当国最大の輸出商品コーヒー生産支援プロジェクト、医療支援、貧困者救済生活支援プロジェクトも見逃せない。また、ティモール海のバユー・ウンダン油田石油ガス掘削プロジェクトには、日本からもインペック



大統領府



執務室にて

ス石油が参加しており、東ティモールの国民総生産押し上げ要因となり、財政上も大きな歳入源となっている。

### 大統領選挙と国民議会選挙

2007年5月9日の大統領選挙決戦投票でラモス・オルタ氏が国民の70%の支持を得て、第二代大統領に選ばれた。同氏は1996年に被占領時代の無抵抗独立運動の功績を認められ、ノーベル平和賞を受賞し、02年第一次内閣の外務大臣になるなど、東ティモール一番の国際通として有名である。

2007年6月30日、この国の今後5年の運命を握ると言える重要な国民議会選挙が行なわれた。前議会においては左翼的傾向が強いフレテリンが過半数を握り、アルカティリ首相の強権的な政治手法に問題があった。そこで政治からの引退の意向を示していたグスマン前大統領が急遽グスマン新党を作り、民主主義路線を堅持するべく立ち上がった。65名の国会議員を選ぶための総選挙結果ではフレテリンは過半数を大きく割り込んだが、第一党の地位は守った(21議席)。

### 新しい政治状況と東ティモールの将来見通し

オルタ新大統領は、2007年8月6日にグスマン前大統領の指導力の元に結集した第2位のグスマン新党、3位、4位の連立(議席数は37で過半数を超える)で政権を担うようグスマン氏に首相就任と組閣を要請し、エミリア・ピーレス経済企画大臣他の有能なテクノクラート中心の内閣が発足した。



1月3日の誕生日に集まってくれたJICA、日本大使館の仲間たちと

新内閣は着実に、移行期予算(07年7月～12月)、新年度予算(08年1月～12月)の策定、国会承認などを行なっている。今後とも國父と仰がれるグスマン首相率いる新内閣が、地道な努力により治安回復、国民の貧困削減、インフラ整備などの国造りを着実に実行されるよう期待している。そのために日本の果たすべき役割も、大きいものがある。(2008年1月末筆)

【事務局注：本案件には、2003年12月以降ABIC活動会員の皆さん  
が3代続けて専門家として派遣されています。

初代／高岡淳二氏（元東京銀行）、2代目／畠宏幸氏（三井物産）、  
3代目／星野和俊氏（筆者）】

### 政府関連

## 地中海の南の岸辺から

JICA シニア海外ボランティア チュニジア商工会議所輸出振興

すぎたに きよし  
杉谷 清（元住友商事）

昨年3月26日に成田空港を発ち、パリ経由チュニス(カルタゴ国際空港)に予定通り安着。迎えのバスの車窓から街並みを懐かしみながら、再び踏み入れた中東の雰囲気を実感した。日差しが強く、透き通った大空が広がる光景は正に地中海式気候の土地。道路や建物は過去の他中東諸国と同様に雑然としており、貧しさも垣間見える。それでも、チュニジア人には天然の陽気さが備わっているように思える。友人の中には中央アフリカ諸国を想像して本気で心配してくれた人もいたが、チュニスはヨーロッパの主要都市とも遜色ない国際都市に思えた。

2007年、私は61歳になるという年で、今ならまだ海外生活ができるという思い込みに身を任せ、JICAのシニア・ボランティアとしてチュニジア第二の都市スファック



商工会議所のフランス人とチュニスのシニア・ボランティアと共に  
(筆者右端)

ス市の商工会議所で輸出振興に協力することとした。これで毎日通った通勤地獄ともお去らばと。

スファックス市はチュニス市から260km離れたチュニジアの中南部にあり、人口は60万人とも40万人とも言われているチュニジア第二の都市。JICAの車でチュニス市



ローマ時代からのオリーブの大木  
(地上に出ているのは枝で木の本体は土の下)



海沿いの我が家から見たスファックス市方面の夕日

から南に下るに従い、独特な山々と多彩な木々が彩る風景から身の丈のやや低いオリーブの樹海が広がってきた。そのオリーブの樹海を越えると土漠の風景と共に港町であり、商工業都市でもあるスファックス市に入った。約3時間のドライブだった。実は、チュニス市からスファックス市まで特急列車もあり、同じく3時間で到着する。

次の日、赴任先の商工会議所にJICAのスタッフと挨拶に行く。商工会議所は小振りながらも大理石を使った玄関等、当地としては凝った造りの建物であり、その中に当地的製品も並べられていた。私は取敢えずということで同時に赴任したもう一人のシニア・ボランティアの方と共にその展示場に席を並べることになった。私のカウンター・パートはフランス語とアラビア語を話す海外展開担当次長の女性。直ぐに、この商工会議所にはかなりの女性スタッフがあり、男性スタッフは少ないことが分った。

当国は女性の就労に力を入れており、欧米諸国からも高い評価を得ているとのこと。従い、男性の失業率はかなり高い。この商工会議所のスタッフの中に唯一英語のできる

フランス人の女性があり、英語しかできない私にとり大変貴重な存在となっている。当地にあるフランス館と彼女の存在等が、以前、この地がフランスの植民地であったことを彷彿とさせてくれる。

スファックス商工会議所の主要な業務としては、①国際関係の維持、②輸出振興、③展示会等の策定・実施、④若手の教育、等があり、その業務毎に19の委員会があり、30名の委員が選出されている。委員のほとんどは当地の経営者であり、実務は常勤の所員25名で行っている。着任当時、同商工会議所は会頭選挙で忙しく、輸出振興どころではない、という感じであったが、会頭が再選され、落ち着きを取り戻している。

現在、私はオリーブ・オイル生産の中心地であるスファックス市の主要な農園及び工場を見学した結果を踏まえて、地中海式気候に恵まれ、肥料を撒く必要のない豊かな大地で、農薬を使う必要のない強い品種から採れるオーガニック・オリーブ・オイルを日本等に輸出すべく長期的な戦略策定に協力している。もちろん、今は展示室の仮の席から新しく用意された部屋の席で。

## 新刊紹介

### 中国担当者にこの一冊を！『中小企業の中国進出Q&A』

のなか よしはる  
野中 義晴（元丸紅、ABIC会員）著 蒼蒼社出版 A5版350頁 定価2,730円

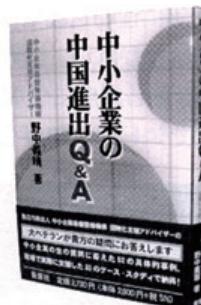
本書は、中国進出に関わる中小企業の質問や講演テーマなどを、Q & A形式にまとめたものである。筆者は、中小企業基盤整備機構を通じて訪問した約30の都道府県の企業から実際に様々な相談を受け、また、それら企業の経営者と中国各地を回り、関係当局や進出企業から貴重な情報やアドバイスを得た。

大手企業の海外進出には、関係事業部門に加え、財務、審査、法務、人事・総務部門等の知識や経験が総動員される。しかし中小企業の場合、限られた人材で多くの決断をしなければならない。また氾濫する中国関連記事や情報の中で、「中国に進出したいが、何から始めればよいのかわからない」という経営者も少なくない。

本書は、筆者自身の商社勤務と中国駐在経験を踏まえ、それと対比しながら、中小企業の陥りやすい落とし穴など、多くの事例と新しいデータに基づく解説に努めている。「13億人の中国市場」は、コロンブスのアメリカ大陸発見の比ではない。大市場に隣接することの幸運さを、多くの中小企業に実感して欲しいと願い執筆された書である。

構成：第1章 中国への進出に当たって  
第3章 進出先の選定方法  
第5章 従業員採用のかんどころ  
第7章 経営リスクマネジメント

第2章 様々な進出形態  
第4章 会社設立と運営  
第6章 中国での販売  
第8章 中国を知る



## 政府関連

## グアテマラでのシニア海外ボランティアの2年間を顧みて

早期優遇退職制度を利用して仕事を離れた当時から海外でボランティアの仕事が何かできないかと思っていた。それが退職して直ぐにABICへ登録加盟した理由の一つでもある。

JICAのシニア海外ボランティア（SV）のことも知っていたが、募集要項を見ても自分には特殊な技能知識が無く、無理だと諦めていた。それがグループコーディネーター（現在は呼称が変わって渉外促進）という私にもできそうな新規の募集があることを知り、早速応募したところ採用された。

2006年4月にグアテマラに赴任し、1944年創立という歴史ある国立中央農業学校に派遣されている2人のSVを学校側との交渉等において言語面で支援するのが私の受け持ちであった。お一方は学校に新設された大学教程部門における木材加工部門のDidactico（授業カリキュラム）マニュアル作成が仕事で、担当の先生との打ち合わせの際の通訳、更に日本語で作成されたマニュアルのスペイン語への翻訳が私の任務であった。もう一方は食肉加工専門の方で、学校に新設される食肉加工工場に関する助言をしており、私はその通訳を務めた。これらの役目の他に自分自身の目標として、新規SV案件の発掘を考えた。

グアテマラの地理、社会情勢等に興味のある方は、インターネットを利用すれば山のように情報が検索できるので、私は自分が見たこと感じたことを通じてこの国を紹介したいと思う。

2006年3月末、改修中でごった返す空港に到着した際、まずこの温暖な気温に驚いた。以来2年近く首都グアテマラ市の近郊に住むことになったが、普通の生活をしていればまず汗はかかない。世界地図で見るとあの熱帯のバンコクとほぼ同じ緯度に位置しているが、標高が1,500mぐらいがあるので涼しい。年がら年中20度前後の気温であるから、



まえかわ しげじ  
前川 恵次（元 豊田通商）



JICA経由でグアテマラ経済省から依頼された品質管理体験談を2006年全国品質会議で講演する筆者

私のようなシニアには最高の気候である。

次に驚いたのはこの国の自然の豊かさである。首都をはじめ主だった都市は山間の盆地に位置しているが、周囲の山々も緑豊かな樹木で覆われている。地方にドライブすると、遠くの山裾まで広がる段々畠や山々の峰が連なる大パノラマを堪能できる。車窓に見える景色は正に墨絵の世界そのものである。冷涼な気温は葉物野菜の栽培に適していて、日本とほとんど同じ野菜が手に入る。

3番目に驚いたのがこの国人の人達の挨拶である。グアテマラ市のような大都会でも街角やビルのエレベーターに乗り降りする際に人々は皆声を出して挨拶する。ましてや、私が住んでいるグアテマラ市近郊にある古都アンティグア（世界遺産）では、街角で立っている物売り、門番、誰でもそれ違う人は皆目が合えば必ず挨拶する。

家内の方はすんなりとこの習慣に馴染んだようだが、日本の俗社会に慣れている私には、最初はなかなか返事することができなかった。どうしても何かあるのでは、と勘織ってしまう。日本でも昔はこういった習慣があったと思い出すのに時間がかかった。全く見知らぬ人でもこうして会釈して挨拶を交わすことで、その日一日が楽しくなる。

グアテマラの人達は、決して生活は楽ではないはずなのだが実に屈託がない。一方で、他のラテン系の人たちと違ってグアテマラ人はどちらかと言うと内気な感じで、取っ付きは悪いが、一旦仲良くなると本当にいい人達である。それが日本人がもう一度訪れたいとよく言う理由なのだと思う。この年になって思いも寄らず、こうした貴重な経験ができたことを大変感謝している。



赴任先の国立中央農業学校（創立1944年）



グアテマラ市から車で3時間ほどの所にあるアティトゥラン湖の周辺にアティトゥラン火山とトリマン火山が連なり、世界で最も美しいと言われている

## 教 育

## あくなき「知」の探求

せん だ ひで き  
千田 英樹 (元住友商事)

1981年に発足した生涯学習の学び舎「早稲田大学オーブンカレッジ」は、江戸時代「ハ丁堀同心屋敷」が置かれていた所にあり、2007年には約1,400の講座を開講し、27,000名の受講生、32,000名の会員を有する斯界の雄である。ここでは「江戸・東京」、「心と身体ケア」、「生活」、「総合」、「ビジネス・資格」、「外国语」と広範な分野で教養講座の輪を開いている。「総合」には、「人間の探求」、「芸術」、「歴史」、「世界」、「文学」、「自然科学」と私が2007年7月と8月に講座を持たせていただいた「現代社会」の教室がある。

事前に事務局に打合せでお伺いした時驚いたのは、同じジャンルの講師に“インテリジェンス戦略”で著名な手嶋龍一氏（元NHKワシントン支局長）がおられたことであった。ABICの知名度とその講座実現の努力に感動すると共に、身の引き締まる思いを強くした。

授業中の教室を幾つか廊下から見学させていただくと、ムンムンする熱気が教室の外にまで伝わってきた。私の講義テーマは「目が離せない新しいロシア」で、「ロシアと日本の関係」、「ロシアの天然資源」、「ブーチンのロシア」、「ロシア人のものの考え方」の四つに分けてお話させていただくことになった。

当初どのくらい受講生が集まるのか心配であったが、幸い定員オーバーとなった。講義を進めるごとに感じられたのは受講生の知的レベルの高さであった。昭和30年代から激動の半世紀の間、日本が“貧しさから豊かさ”へと登りつめた時代に必死に努力してこられ、講師の私と共に想い出、共通の体験を持っておられる方々である。当時の日本では、官民とも「社会主義イデオロギー」に何らかの「思い」を持ち、一人一人が「自分の社会主義観」を持っておられたのではないだろうか。

私は、ソ連邦・ロシア共和国での多くの体験をテーマに沿ってお話しして、“どうしてあの狂気の社会が生まれ、増殖し、崩壊していったのか”を淡々と語ることに徹しようと思った。独りよがりになることを極力避けて、受講生が冷静に判断できるように、その助けとなる材料の提供に心がけた。



講座開始前に近所の喫茶店やハ丁堀校の談話室で、顔見知りとなった受講生達に講義内容についての感想とかコメント・要望などをこまめにお聞きした。同時に講師控え室で他講座の先生方から「一口アドバイス」を受けたりした。

嬉しかったのは、講義が終了すると多くの受講生が拍手をしてくれ、何人かが熱心に質問をぶつけてくれたことであった。講義の時間より終了後のQ&Aの時間のほうが多いくらいであった。質問の幾つかをご紹介すると、民族・歴史に関するものでは“フン族の民族構成”、“ロシア人とトルコとの関係”、“エストニア民族の悲劇”、経済関係では“ロシアファンドの不安要素”、“サハリン2へのロシア政権の横暴”、文化関係では“ブーチン政権の教育実態”、“ギリシャ正教のまやかし”、“ソ連時代のロシア民衆の心”、“ロシア人のスポーツ能力・芸術能力(音楽・バレー)などでそのレベルの高さに驚かされた。また、事務局経由で受講生達からファンレター的な手紙を頂いた嬉しさは忘れられない。

ABICと事務局の「早稲田大学エクステンションセンター」との良好な連携、優れた講座運営システム、ABIC大学講座担当コーディネーターの方のアドバイスで作成した各種資料が受講生に好評であったことなどから、緊張感のみなぎった満足のいく講義をすることができた。2008年も引き続き講座を持たせていただくことになり、舞台裏の皆様のご協力に対して心から感謝している。

## 新会員登録票・アンケートを未提出の方はご協力願います。

当センターホームページ「活動会員入会案内」(<http://www.abic.or.jp/register/index.html>)の申し込み書にご記入のうえ事務局宛てお送りいただきますようお願い申し上げます。

お問い合わせ先 : Tel. 03-3435-5973

e-mail [mail@abic.or.jp](mailto:mail@abic.or.jp)

ABIC事務局 道家

## 教 育

## 青山学院高等部での初講義を終えて

おかもと やすひこ  
岡本 靖彦 (元三井物産)

2007年春、ABICより青山学院高等部での初講義の講師募集があり、講義概要を記して応募したところ、先方から指名されたとの連絡を受けた。6月26日に「最近の世界における米国を考える」と題して講義を行なった。青山学院大学での講義経験はあるとはいえ、付属高等部へのABICからの講師派遣の嚆矢となるため、不安と緊張感を持って2時間に亘る講義に臨んだが、3年生の男女生徒諸君約50名が終始熱心に耳を傾けてくれたので胸を撫で下ろした次第。

どんな講義を行なったかについては、小生がくどくど述べるよりも、後日送付されてきた生徒の赤裸々な感想文を読んでもらった方が良いと思われるので、以下にアトランダムにピックアップした6人分を紹介したい。

- 「今の世界に与える米国の影響力、存在の大きさを改めて感じた。歴史的背景、外交など様々な視点から米国について考えることができた。また米国の成長過程を見ることで、現在のグローバリゼーション時代における世界の姿を考えるきっかけになった。一番印象に残ったのは、世界に様々な宗教・価値観が存在し、それを知ることは国際社会を理解する上で非常に重要であるという指摘だった。熱のこもった非常に有意義な講義であった。」
- 「非常に興味深かった。力強い話し振りがすごく聞く側を引きつけて離さなかった。話もくわしくて判り易かつた。米国の体制とイスラム諸国特にイラクの体制の違いがすごく興味深かった。米国が無理矢理にイラクに民主主義を強要しても、血縁主義のイラク社会にはなかなか受け入れられないだろうということを始めて知った。」
- 「岡本さんの海外での実体験を踏まえた9・11事件の説明や米国の独立から現在までの歴史的経緯を解説してもらい、今までよりも米国をよりよく理解できたと思う。ぼう大な情報量の話であったが、判り易かった。“米国を縦と横の双方から理解しよう”という説明が具体的でよく判りました。授業は、とても熱く激しくてよかったです。」
- 「米国から中東までの社会的特徴などがよく判った。日本は石油の90%・LNGの22%を依存している中東イスラム社会のことをよく理解すべきことを知った。また、資本主義の勝利を予言したフランシス・フクヤマやイデオロギーの対立から文明の衝突の時代が来ることを予言したサミュ



エル・ハンチントンの話を聞き、兩人はすごい人物だと思った。これからは単独行動主義よりも国際協調主義を重視し、世界各国が仲良くすることが重要であると思った。」

- 「数字をたくさん出して、具体的な話をしてもらったので、とても判り易かった。最初は経済の話だったのに、気がついたら政治の話になって、流れがごく自然だった。講義を聞いて、米国のすごさやスケールの大きさを知ったが、何より、自分の知識量の少なさに驚いた。米国に対する“経済大国”“軍事大国”“多民族国家”というあいまいなイメージしか抱いていなくて“何が”“どのように”という具体的な知識が抜け落ちていたが、それが埋められた気がする。また米国のみならず中東諸国など他国の文化を理解することが重要であると思った。」
- 「とても熱い講義でした。普通の授業では得られないぐらい専門的で興味深い話が聞けてよかったです。縦と横の歴史で見る米国やイスラム社会に住む人々の根本的な考え方など、とてもためになる知識が得られたので、これから政経などの授業に役立てたいと思う。」

大学と同様、高校においても、われわれ商社マンOBによる長年の国内外での豊富かつ貴重な体験談に基づくリアルな講義が、聴講者に普段の授業からは得られない驚嘆と感動を与えるものと思われる。青山学院においても、高校から大学まで一気通貫でABIC講座が継続的に常設されることを祈って止まない。

## 教 育

## ベトナム・ダナンでの小・中学生への日本語教育

私は今ベトナムのダナン市にいる。ベトナム中部の海浜都市で、ベトナム戦争時代米軍の基地があったところである。住友商事が社会貢献活動の一つとして2年前に始めた“日本語を核とした日本文化交流プロジェクト”に携わっている。住友商事がABICにコンタクトして小生に打診があったご縁である。

この背景には、ベトナム政府が日本政府の支援を受けて4年前から試験的に中学校で日本語科目を導入しており、住友商事もそうした両政府の取り組みに沿って、このプロジェクトを実施した。そして、今後、日本企業も進出し、急速な発展が見込まれるダナンに日本語と日本文化に触れる教室を開講することを決めたものである。

ベトナム中部にも日本語学科を導入した中学校が4校(ダナンに2校、フエに2校)あるが、住友商事の教室は、これらの生徒は対象外で、普通の中学校の課外活動の一環として始めた。現在2学年、約85名の子供たちがこの教室で学んでいる。年齢的には日本の小学6年生から中学3年生までと幅広い。

ここダナンでも日本語熱は高く、だいたい募集人数の3倍くらいの応募がある。日本、特に工業国日本に対する関心も高く、親日的と言える。ベトナムというお国柄、そしてその中でも地方都市ということもあって、ここの人々、

特に子供たちは、すでに日本から失われて久しい温もりが感じられる。

また、まだ物資に溢れた社会ではないので、何かに接したときの彼らの感動と、それを率直に表す言葉には、逆に感動させられる。



真剣な眼差しであやとりを習う生徒たち



日本食体験



あやとりを教える筆者

いとう のぶひろ  
伊藤 修博 (元住友商事)

日本での教師経験者がそのような光景に接し、「折り紙1枚を貢って喜ぶなんて、日本ではとても考えられないことですよね。こういうふうに反応されると、もっと何かをしてあげたくなりますよね」と語っていたが、

私はお蔭様で毎日のようにこのような経験をしている。

また、ダナン大学日本語学科の講師(昨年同学科を第一期生として卒業)や同学科の4年生にアシスタントとして、また3年生の3人には折り紙教室のアシスタントとして手伝ってもらっている。このような人たちにも、私からそのレベルでの日本語および日本文化伝達のお手伝いをしており、これが将来日本文化の更なる紹介に寄与してくれることを楽しみにしてやっている。このような環境下で日本語を教えることができ、そして少しづつであるが日本文化に触れてもらえることは日本語教師冥利に尽きるといつてもよいと思う。

商社現役時代からの私の持論であるが、“日本のODAの半分くらいは日本(語)教育に当てたほうがよい”と思っている。国際化時代・外国人労働に多かれ少なかれ頼らざるを得ない時代を迎えて、日本理解を得るために最も歩留まりのよい手段であり、特に日本へ招聘したときの歩留まりはとても高いレベルにあるからである。日本の公的機関はもちろん、民間にも、もっとこの点を考えもらいたいものだと思っている。

最後に、ABICの皆様には釈迦に説法かと思うが、ベトナムは小乗佛教の国で、中国に約千年間支配されていたこともあって、今なお中国文化が色濃く残っている。約百年前までは漢字文化圏であった。



昨年の夏休みに筆者自宅に集まった生徒たち

## エッセー 新上海から 地鉄（メトロ）に乗って

かつべみのる  
勝部 實（元丸紅）

ABICとの縁で、2006年6月初めから9月末まで、上海の地下鉄通勤を経験した。地下鉄2号線の始発駅中山公園から勤め先がある浦東新区・張江ハイテクセンター駅まで片道40分足らずだ。

駅前にそびえる高層アパートの35階から日立製の高速エレベーターに乗り、地下道に入ってホームに着くまで僅か5分だ。

始業1時間前には出社できるよう、早めに家を出るから悠々と席が取れる。しかも帰りは始発駅になるから、ありがたい。

ドイツのジーメンス社製の車両は車体正面に赤のラインが入った洒落たデザインのステンレス製。シンプルで堅牢である。

車内のデジタルTV始めIT化も日本と同様進化しているが、日本製ではない。シート、床、内壁、つり革まで、ほとんどが強化プラスチック製だ。空調も良く効き、汚れや清掃に配慮した造りになっている。

運賃は2元から5元まで（30円から75円）。すべての公共交通機関に共通の磁気カードがある。バスは勿論、タクシーにも利用できるから大変便利だ。

JR東日本の「Suica」と首都圏私鉄「Pasmo」の相互カードシステムより数年も早く導入している。ちょっとした驚きだ。

乗客のマナーに関しては、まだまだ国際化からはほど遠い。政府の広告ポスターや駅放送では繰り返し、マナー向上のスローガンを強調していた。

「マナーを守って愛される、可愛い上海人に！」  
「マナーを守り眞の国際人、文化人になろう！」……。



しかし指導員が見えなくなると、とたんに豹変する。朝のラッシュ時、途中の駅で扉が開く。ホームの客が、われ先に乗り込む。降りる客が大声で叫ぶ。押し合い、へし合いが始まる。

「おいおい、降ろしてくれよ。乗り越したら、また会社に遅刻して、首になっちゃうよ」「もたもたするな。俺だってこれに乗り遅れたら遅刻だよ。降りたいなら力で押し返せ」。まるで格闘技の世界だ。

座席に座り、イヤホンを耳栓代わりにして、この光景を眺めていると、チャップリンの無声映画「モダンタイムス」を見ているようだ。

突然、目の前と隣の席から、大きな騒音が飛び込んでくる。「ウエイ！ ウエイ！（もしもし）」携帯電話の声だ。前面からは若い男だ。そして隣からは中年を過ぎたオバサンの甲高い声だ（今日は運が悪いな。可愛い娘なら我慢するのに）。耳栓代わりのイヤホンも役に立たない。

中国語の発音は四つの声調（四声）があり、小さな声では意味が伝わらない。初めての外国人には驚きだが、仕方ない面もある。

ここではまだ、車内での携帯通話が禁じられていない。おまけに、話が長いのだ。通話料金が日本の10分の1ぐらいで安いから通話が主体で、メールはあまり使わないようだ。

果たして、2008年の北京オリンピックまでに、マナー向上が間に合うのだろうか？

感心したのは、車内にスリはいるが、痴漢がめったにないことだ。中国女性は気が強く、大声を上げるらしい。一度取り押さえられたら、厳罰だ。怖くて手が出せないので。

日本のように痴漢事件が多発し、男性にとって冤罪は迷惑だが、被害に遭う女性にとっては上海での通勤のほうが安心なようだ。



上海から北京に立ちよる。  
2006年9月末。

**書評****『男なら、ひとり旅』**

布施 克彦 著 PHP新書 2007年11月29日発行 價格：本体700円（税別）

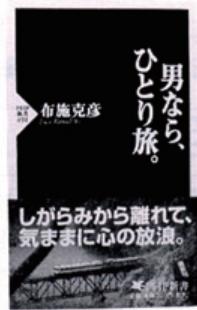
ABICの大学講座コーディネーターとして活動している布施克彦さん（元三菱商事）の新刊本を紹介したい。タイトルは演歌を連想させかねないが、長年しがらみの中で生きてきた中高年世代の男たちに、これから的人生を充実させる有効な手段として「男のひとり旅」を勧めている。

人生も還暦を迎える年齢になると生活環境も大きく変化する。定年となれば組織のない個人として生きることになるが、組織とのかかわりが深かった人は自分は何者なのかと悩みも出てくる。著者は、自分について考えるには自分とじっくり付き合うことのできる「ひとり旅」が良いと自身の経験から述べる。組織から離れたとしても家庭を持つ家庭人からすると「ひとり旅」なんてできるかとの異論も出ようが、この点は良好な家庭環境の確立が前提条件と断っている。根気と譲歩でコミュニケーション良く、やはり家庭内の理解を得ることが肝要だ。著者も自身の家族旅行を紹介しており、「ひとり旅」だけではない時間をしっかりと持っている。フーテンの寅さんとは違う。

組織から離れ、家庭からも離れた「男のひとり旅」の非日常性を日常の生活に適度に挿入すると、生活リズムと奥行きが生まれると説くものの、「ひとり旅」は必ずしも楽しくないとコツも教えてくれる。詳しくは本書を読んでいただくとして、コツの一つに「ひとり旅」のテーマを決めることうを挙げている。日本再発見や記録への挑戦などいくつか紹介するが、著者自身の「ひとり旅」のテーマに「古代商社の足跡を求めて」がある。商社を辞めたつもりが離れきれていないのか元商社マンらしいテーマだが、おう盛な好奇心と探究心による旅の出版を次の楽しみにしたい。

旅好きの人生の達人が送る案内書である。

(ABIC 理事長 三幣 利夫)

**日本語教師養成講座 第4期生募集**

2006年10月に日本語教師養成講座第1期を開講以来、第2期、第3期と回を重ね、この3月中に第3期生8名の方々が修了予定で、目下最終コースを履修中です。つきましては、第4期養成講座を4月から開講することになり、目下第4期生の募集を行っています。期間は4月15日から9月末、2クラス編成、24名の首都圏の会員及びご家族を対象とする100時間短期養成講座です。ご家族の受講者も回を追って増えています。会員の配偶者をはじめご家族の方も多数受講されることを歓迎いたします。なお、募集要領につきましては、2月20日付Eメールにて首都圏の会員の皆様にご案内済みですが、ここに改めてご案内いたします。

申込締切日：2008年3月24日（月）

受講期間：2008年4月15日～9月末

受講日時：下記のいずれかのクラスを選択、週1回受講

①火曜日クラス 10時～13時 ②金曜日クラス 10時～13時

日本文化・異文化の講義は8回のみ、火曜、金曜14時～17時

場所：社団法人 日本貿易会会議室（東京都港区浜松町2-4-1 世界貿易センタービル6階）

受講料その他詳細お問い合わせ先：日本語教師養成講座担当 山田

E-mail : nihongo@abic.or.jp TEL : 03-3435-5973

**会員入会のお願い**

国際社会貢献センターの活動にご賛同頂き、会員として資金的援助をしていただける個人の方や企業、団体のご入会をお願い申し上げます。

種類	内容	年会費	
正会員	センターの活動を推進する個人、法人及び団体。（理事会の承認を得て入会）	法人及び団体	一口 50,000円
		個人	一口 10,000円
賛助会員	センターの趣旨に賛同し、会費を納める個人、法人及び団体。	法人及び団体	一口 10,000円
		個人	一口 5,000円
活動会員	センターに登録し、センターの事業に参加しようとする個人。	不要	— —

## 法人・個人正会員並びに法人・個人賛助会員各位

ABICの活動にご賛同下さり、日頃のご支援と共に資金的援助を賜りまして、ABIC一同心より御礼申し上げます。ここに皆様のお名前を掲載させて頂きます。

### 正会員

団体・法人（16社）〈社名五十音順〉 〈10口〉(社)日本貿易会 伊藤忠商事(株) 住友商事(株) 双日(株) 豊田通商(株)  
 丸紅(株) 三井物産(株) 三菱商事(株) 〈4口〉(株)日立ハイテクノロジーズ 〈2口〉稻畑産業(株) 長瀬産業(株)  
 阪和興業(株) 〈1口〉協同木材貿易(株) 興和(株) JFE商事ホールディングス(株) 蝶理(株)

個人（6名）〈敬称略・入会順〉 池上久雄 寺島實郎 小島順彦 宮原賢次 吉田靖男 岡素之

### 賛助会員

法人（2社） (有)イーコマース研究所 キーリサーチネット(株)

個人（311名）〈敬称略・氏名五十音順〉 〈5口〉北條弘司 〈2口〉荒木道介 岩本洋之 上田博晟 遠藤寿一  
 及川洋 小寺真行 鬼山敬邦 川俣二郎 久佐賀義光 公平伸夫 笹井英毅 志岐眞弓 高廣次郎 多田勝彦  
 田中武夫 玉木興畠 綱川渡 東宮邦雄 原芳道 坂東寛隆 日野勝子 福田洋子 藤井眞 前田歎史  
 牧村恢臣 三木紀元 柳沢信義 山田芳正 山本一良 山本寧雄 〈1口〉会川精司 青木一夫 赤田堅  
 浅田道明 芦刈茂樹 芦田均 東光子 安達晋 安福哲一 安部忠 阿部徹 阿部雅志 荒尾紀倫 有田五郎  
 有田捷一 居内律治 庵原專三 伊賀豊和 伊賀山欣也 猪狩眞弓 生島幸哉 池崎元彦 石川清 石田錠二  
 石束吉孝 石橋満 伊東孝之 伊藤輝雄 伊東泰 稲永丈夫 井上行芳 今井宏 今井正孝 今田利征 上田勲  
 上野和郎 上野日出雄 上森義美 宇佐見和彦 薄葉徹郎 宇田定三 内田康治 漆崎隆司 江藤茂雄  
 櫻本啓一郎 櫻本盛明 江幡吉信 海老原茂 大久保浩司 大久保徳衛 大浩義之 太田宏 大塚昭雄  
 大西稔男 大道豊彦 大森日出太郎 岡田一茂 岡田恵二郎 岡部紘 岡部好夫 岡本靖彦 小川晴久  
 小川富美恵 小口良喜 小國輝雄 小野勝 小畠克之 小船井達夫 表尚志 角井信行 風間誠 梶原昭次  
 片岡紀二 勝部實 加藤正芳 加藤克 金井好弘 金子康之 金子義久 嘉根俊治 辛島洸 加輪上敏彦  
 川副和之 川西勇夫 川村哲也 川本恒彦 勘山悟 岸達也 喜多創平 吉川和夫 木村好作 木村秀志  
 久木田修司 楠井裕章 桜座武敏 久保田堅一 倉又則夫 黒岩浩一 黒岡誠一 国分利敬 古園井良  
 小畠孝治郎 小林庄右工門 小峯征三郎 小室洋三 近野治夫 齋藤勝吉 酒井栄造 坂井啓治 酒井邦展  
 坂本俊寛 崎貢 笹岡治男 佐藤徹 佐藤宏 佐藤充宏 佐藤隆二 佐良木忠男 沢田修吾 澤田史郎  
 澤田豊治 七字道彦 篠崎尚 島悠紀夫 白土茂雄 須賀徹 須賀直比古 鈴木孝尚 鈴木紘司 関晃典  
 関統造 関米勝 関本喜茂 曾我典夫 園田真一 醍醐俊明 高木俊彦 高木裕昭 高崎浩敏 高嶋宏臣  
 高嶋正文 高田維有 高田弘 鷹津俊一 高梨和彦 高橋洋 高柳貞男 田島一靖 立石揚志 田中昭彦  
 田中功 田中剛 田中稔也 田邊肇 田邊正明 谷川達夫 田内裕 丹治敬 淡野武司 千野滋樹 千原長美  
 塚谷正彦 辻萬亜雄 津田道夫 土屋英五 都築秀之 坪井哲夫 坪井雅敏 寺澤昌敏 戸川順治 戸川隆夫  
 富島紘一 友國洋 中倉弘紀 中込喜雄 中島幸太郎 中島隆一 中園智子 仲田慎太朗 永田明司 中西孝之  
 中西康孝 中野英俊 中野正義 永峰千年 中村昂 中村紀雄 中村恭紀 中山文麿 西山勝昭 西山慈恩  
 新田充成 野口順一 信森勝治 野村哲三 則満洋祐 萩谷敦 橋本裕一 橋本文男 橋本政彦 橋本勝  
 蓮沼恒郎 畑宏幸 花澤和郎 羽生憲夫 浜田元雄 林常介 曲笠徹 菱川治 曲比野圭三 平田一男 平野潤  
 平野實 廣田滋 廣田幸男 福井隆治 福田繁 福ノ上敦 藤井俊彦 藤井希祐 藤井則雄 藤川一弘  
 藤田敬子 藤田政晴 藤田幸雄 藤原照明 布施克彦 星出拓 細野良敦 前田喜章 前田祥治 前田直明  
 増田孝次郎 増田政靖 松井清治 松浦義則 松岡壽夫 松下敏明 松本信司 松本時男 三上亞佐橘 翠政之  
 溝渕弘也 三栗敏 南賢 峯本晴輝 宮内貴正 宮川正裕 宮崎善嗣 村岡信明 村瀬和男 村瀬省三  
 村林栄彦 森和重 森健 森田聰 森達也 森松直毅 安田勤 矢野清一 矢野裕明 山内幸雄 山岸正雄  
 山口健 山口真人 山田雅司 山本啓二 山本博勝 湯浅康生 萬木寛 横井正豊 横田淑子 横溝肇  
 横山泰雄 吉川正男 吉田紘 吉田裕 吉富茂隆 李栄 渡邊晴郎

**賛助会員入会のお願い** ABICの活動の一層の拡大に向けて賛助会員へのご入会を是非お願い申し上げます。

活動会員 1,766名

(2008年2月29日現在)